

1 われわれはどこへ行くのか？

①コロナが発生してから、3 年が経った。「もういい加減にしてほしい」という思い、「もう終わるだろう」という期待はあったが、当然ながら、人間の思いとウィルスの増殖とは関係がない。

これほどの災害はわたしにとっても人生ではじめての体験で、今までの知識も経験もほとんど役立たない。まして、若い世代にとっては、未曾有の事態だろう。

コロナがこれからどう展開するか、人間心理がどう揺れ動くか予測もつかない。

②欧米では、外出自由・マスクなしで生活を楽しむ様子がテレビで放映される。英国ではコロナを通常の風邪と同様に扱っているという。それがあたかも見習うべきことのように、日本では報道される。

中国でもゼロコロナ政策は庶民の反感を買い、緩和せざるを得なくなった。結局、人間は長期間の災害に耐え得るほど我慢強くはない。情緒や情動に動かされる動物である。それが人間である。

③コロナ禍の日本は、今どういう時期にあるのか。果たして収束期や終焉期に向かっているのか、または、西浦説のように、日本はまだ「地域的流行期」にあり、次のステージの「人・コロナ共棲期」に至るまで数年かかるのか。

もしそうだとすれば、コロナ禍は前後 10 年近く続くことになる。この間、死者は高齢者に集中するから、人口構成比も大きく変わってしまう。

それは病院、医療、介護の分野だけではなく、社会に予想外の急激な変化をもたらすだろう。コロナ禍は潜在的にそのような可能性を秘めている。

④われわれは今どこにいるのか、仮説でもよいから、われわれの現在の立ち位置を提示するのが政府/専門家の責務である。コロナ禍の俯瞰図を示すべき時期である。

ところが、政府/専門家は「コロナ軽症説」や「ウイズコロナ」などの甘いイメージを振りまいている。

西浦説は、今後も続くだろう長い航海にあたって、一応の海図を示した。

政府は、今になっても海図なしに航海を続け、なすすべもなく大海を漂っている。

⑤政府はコロナ禍の現状をどう捉えているのか。まさか「コロナ禍は収束期か終焉期にある」と考えているわけではないだろうが、場当たりの対応を見るとそうと確信できない。

そもそも俯瞰する視点などないのか。ひょっとすると、収束期に向かっていると錯覚しているのか。政府と政府ご用達の専門家には不信感が募る一方のこの頃である。

2「巣ごもり生活」を楽しむ

①久しぶりに穏やかな夕暮れである。妻といつもの散歩道を歩いていると、軽トラが止まった。

矢部さあーん。

あらら、Kさんじゃないですか。どこへ行くんですか？

Kさんは、農業をしながら看板屋さんをやっている。多分80代を超えている。

いや、夕焼けの富士山を眺めてこようと思ってね。

ええ！　これから行くんですか？

なに20分も走れば、よいポイントがあるさ。いつもの夕飯前の楽しみよ。

そういうと、天城方面に走り去ってしまった。わたしたち夫婦は顔を見合わせた。何とも素敵な夕方の過ごし方である。

②最近、尾身さんがコロナに感染した。感染症対策専門家のトップでさえ、個人的対策では感染を防げなかった。これまで岸田首相、松野官房長官、尾身会さんと主要メンバーが次々と感染した。コロナ対策の失敗を象徴する、衝撃的なニュースである。

③感染拡大を抑止するのではなく、人出を奨励する政府のやり方はおかしい。こんなことをしていたら、誰でもコロナにかかる、いつでもかかる、どこでもかかる。一瞬の油断で、たちまち感染する。

④こうなったら「巣ごもり生活」に磨きをかけて、自分と家族を守るしかない。
第八波やインフルエンザが迫っている。当分、対面での打ち合わせ、食事会、音楽会、美術館巡りは封印する。ビジネスや交際より、心の内に楽しみを求めることが優先である。
といっても、これ以上巣ごもり生活を続けると、鬱っぽくなるだろう。どうしたものか。

⑤Kさんは、ケイトウ、コスモス、コキア、ヒガンバナなどの花々を栽培し、梅の実から梅干しや梅酒を作る。夫婦で食べるだけの野菜を育て、たまに山菜をとりに行く。
夕焼けの日はふらっと富士山を見にでかける。その成果なのか彼の温室には大きな赤富士の看板が飾ってある。何とも免疫力が高くなるような生活である。

⑥Kさんに触発されて、わたしなりに生活を楽しむための「お楽しみリスト」を作ろうと思い立った。
リストを作るため、あちこちの本棚をひっくり返していたら、貴重なお宝が続々と出てくる。仕事にかまけてすっかり忘れてしまっていた。よくもこんなに買っておいたものである。もったいない！

⑦まずは、この半年間に楽しむ作品を集めてみた。

(1) 読むリスト

西行花伝（辻邦生）、木村兼葭堂のサロン（中村真一郎）、生きがいの研究（神谷美恵子）、ミシェル城館の人（堀田 善衛）、森の生活（ヘンリー・ソロー）など。

(2) 見るリスト

アンドレイ・タルコスキー監督の VHS 数巻、テオ・アングロポリス監督の全集 12 巻、ブッダ(仏陀)のビデオ全 5 巻。
スタートレック Deep Space 9 シリーズ(176 話)。

(3) 聴くリスト

クラシック音楽が主だが、バロック、タンゴ、映画音楽があちこちに散らばって、整理がつかない。どうしたものかと思案中である。

⑧窓際で陽に当たり、ビバルディの「調和の靈感」を聴きながら、モンテーニュを描いた『ミシェル城館の人』を読むほどの至福はちょっと思い当たらない。
ここ半年は、こうして巣ごもり生活に専念したいものである。

3 日本は冷酷な社会である

①コロナの累計死者数が5万2000人に迫る(2022年12月12日)。今年2月中旬には2万人だったが、その後激増した。欧米を模倣し、行動制限をしなかったことのつけである。死者の約90%は、70代、80代の後期高齢者である。

②後遺症患者の急増も見過ごせない。

累計感染者数は2600万人。仮に、20%の人が後遺症に苦しむとしても、500万人を超える膨大な数になる。しかし、患者の実態は不明であり、その2倍、3倍の患者がいるとしても不思議ではない。

③最近の報道によれば、後遺症の危険は若い世代も高いという。注目すべきは次の点である(木原洋美 DIAMOND online 2022.11.16)

(1)後遺症を発症する確率は、高齢者よりも若者の方が高い。

(2)コロナの症状の軽重に関係なく、後遺症は発症する。

④感染した身内、友人、知人にも後遺症に苦しむ人は多い。後遺症の主な症状は、倦怠感、息切れ、不安、抑うつなどである。一見軽いと思いがちだが、欠勤、休職、退職、失業につながる重篤な病である。

1年前に感染し回復したかに見えた50代の友人も、今年の猛暑は体にこたえ、何度も会社を休んだという。行きつけだった和食店の40代の店主は、感染して以来、味覚障害の不安に苛まされている。繊細な味覚が失われれば、店の廃業もありえるという。

⑤後遺症に罹れば、健康な若者も一転して健康弱者となる。若いだけに、後遺症が人生に与える影響は計り知れない。コロナはこのような脅威を宿している。

健康強者にとっても、コロナ禍はひと事ではない。明日はわが身である。

⑥さらに見過ごせないのは、非正規雇用者、有期雇用者、フリーランサー、自営業、未組織労働者などの経済弱者への影響である(就職氷河期世代の多くも含まれるだろう)。

彼らの多くは職場接種の対象外であり、コロナに感染しても自宅療養だといって放置され、入院しようにもつてない。後遺症に罹ったら、失業、廃業は目前に迫る。

今は健康であったとしても、潜在的なリスクは極めて大きい。

⑦65 歳以上の高齢者は 3600 万人（総人口の 29%。2022 年 9 月推計）、非正規雇用者は 2000 万人、就職氷河期世代は 1700 万人を占める。

コロナの被害が集中しがちな高齢者、健康弱者、経済弱者の数は人口の半分を超える。感染拡大期にあって、外出制限も行動制限もすることなく経済を回すのは、弱者を切り捨てる政策の上に成り立っている。

⑧一人ひとりの日本人は、穏やかで温かな人のように思える。だが、自分の小さな幸せを守ることに汲々として、弱者には無頓着である。

経済の低迷が続くと、人は自分の属する集団と集団外を使い分けるようになる。自分とそのムラ社会（帰属集団）は守るが、ムラの外には目がいかない。自分が傷を負うのは嫌だが、他人の痛みは気にならない。

⑨コロナ対策を通じて、日本社会は弱者に対していかに冷たいかが明らかになった。

単に冷たいというレベルを乗り越えて、日本は弱者に冷酷な社会である。

3 年近くのコロナ禍の果てに見たのは、日本社会の業の深さだった。

4 「哲学なき日本」の危機

①「日本には哲学がない」と以前述べたが（本メモ（21）5⑤）が、「だからどうなの？」と感じる日本人は多いのではないかと。だが、それこそが日本的危機管理の根幹にある最大の弱点である。

米国の哲学者・教育学者のジョン・デューイ（1859-1952）はこう喝破する。

哲学の目的は、真理を明らかにすることではなく、現実の問題を解決することである。

彼に従うと、哲学のない日本人は、問題解決が下手だということになる。

②政府のコロナ対策には、日本的思考のひ弱さが露呈している。

「社会経済を回す」というお題目が、具体的に何を意味するかは不明のまま税金を注ぎ込む。

旅行支援をはじめとして、補助金や協賛金の支給、地域振興支援とどこまでも膨らむ。歯止めが利かない。

目先の対策に一喜一憂するのは、下手な仕事師である。できる仕事師は、全体を俯瞰しながら対策に優先順位をつける。

③旅行支援1つをとっても、なぜ、旅行者や旅行業界を支援するのか。基準なしに特定の業界を支援するのは不公平ではないか。そういう検討は脇において、大手テレビも大手新聞も一斉に政府の対策をもてはやす。内容のない言葉のイメージが、マスコミ空間を漂って、何となくコロナ対策の方向が決まっていく。あまりに日本的な、情緒的な意思決定である。

④結局、「感染拡大防止か、経済優先か」の二項対立の罠にはまっていることが、コロナ対策の最大の問題である（二分法の危険性については、拙著『プロ弁護士の思考術』64 ページ以下参照）。

白か黒かの議論は俗受けするが、極めて危うい。白と黒の間には、薄い灰色から黒に近い灰色からまで、無限の中間色がグラデーションをなして存在する。わたしはこれを「連続律思考」（グラデーション思考）と呼んでいる。

⑤わたしの考える外出制限は、そもそも感染拡大期、感染爆発期、感染が高止まりしているときに行う。それも一律に外出を規制するわけではなく、地域、時間、期限などを限定して行う。その組み合わせには、無限のバリエーションがある（本メモ（9）の⑦および（20）の3参照）。最適解を探り当てるのは狭い門だが、やり方しだいである。

政治家や経済人は、外出制限と聞くだけで拒否反応を示すが、まさに二分法の罠にはまっている。政府、専門家、経済人、マスコミは、二分法を捨て連続律思考に立たなければならない。

⑥コロナ対策を通じて、日本的思考の悪しき側面が露わになった。

政府のコロナ対策は、議論を一握りの専門家に委ねて、責任の所在も曖昧のままに、実施されてきた。在野の専門家や国民の衆知を集めることもほとんどなかった。

それが結果として避けられたはずの被害を拡大させてきた。そのことの自覚が全くない。なぜこんな情けない事態に陥るのか？ 日本流の「全員一致日の丸弁当」や阿吽^{あうん}の呼吸で物事を決めるやり方はもう古い。

思考とは、曖昧な想念を具体的な言葉に落とし込むことである。言葉が具体的であればあるほど、思考は明晰である。日本は新しい哲学を必要としている。